

J1-A

二〇一〇年度 入学試験問題
一般第一回・帰国児童入試
国語

注 意

- 1 問題は 一・二 の二題あります。
- 2 試験時間は五〇分です。
- 3 答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出してください。
- 4 受験番号は算用数字で記入してください。
- 5 声を出して読むはいけません。
- 6 試験場の先生の指示があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

約一万年ほど前に、農耕、定住が登場して以来、人間は、単に自然物にたよるのではなく、物を自分で生産して暮らすようになった。しかし、生産をつねに増大させるような経済システムは、本格的にはつい二百年ほどまえから現われたのです。ちょっとこれについて話してみます。

昔の社会は、絶対支配者としての王様がいて、あとは多くの隷属民がいます。隷属民は典型的には、みな自分の田畑に縛りつけられて、生産をする。そのとき、かれらはたとえば、小麦や衣服や最小限の生活必需品を作る。そして作った小麦の半分ほどを王様にもつていかれる。王様はそれで軍隊をやしない、多少のインフラを整備し、支配階級をととのえて国をおさめるのです。

こういう場面では、農民はいわば自給自足なので、いわゆる商品の消費というものはありません。だから支配階級の贅沢品を除いては、商品が交換される必要はほとんどない。したがって、お金の流通もごく一部に限定されている。ここでは資本主義がおこる理由がありません。

ところが、あるところから、とくにヨーロッパで、商品交換(交易)が徐々に盛んになってきた。交易は国を越えて、洋の東西にまたがってくる。とくにヨーロッパにはないもの(胡椒とか嗜好品)などを東から船にのせて持つてくると、うんと高く売れる。その反対も同じです。

商人は高く売れると、もっとたくさん商品売りた。そこで、農村に入り込んで、農民に特定の品物をもっとたくさん作るように促します。どうやったら、ものがたくさん生産されるか。その秘密は「分業」です。

有名な経済学者のアダム・スミスは『国富論』という本の冒頭に、ある工場での分業がいかに生産を高めるかを見学して驚いた、という話を書いています。流れ作業で物を作ると、一人で作るのにくらべて、生産の効率がなん百倍も何千倍も上がるという実例です。

ともあれ、こうして **A**、という商業の動機は、**B** という製造業の発展をうながし、この両方がお互いに作用しあうことで、資本主義という経済システムの原型になってゆきます。私はそれを、「**普遍交換と普遍**

分業のサイクル」と呼んでいます。あらゆる場所で商品の交換が盛んになり、あらゆる場所で、分業が行なわれる状態です。

しかし、交換と分業が刺激しあっているだけでは、じつは本格的な資本主義は現れない。それは「市民社会」、つまり、一般の民衆の「自由」が解放される社会、だれでも自分の好きな仕事を見つけ、**C** 自由をもつ社会が登場することではじめて可能になるのです。

というのは、近代社会が現われるまでは、商品交換は、あくまで王侯や金持ちの商人の間だけに限定されていて広がりをもらえない。普遍交換が普遍分業をうながし、生産性を拡大してゆくけれど、結局どこかで過剰になってしまふ。

ところが、市民社会では、すべての人間がこの分業生産と消費のプロセスの中に入ってきます。すると、普遍交換↓普遍分業↓普遍消費というサイクルが成立し、このサイクルはどんどん大きく拡大してゆくことが可能になるわけです。

こう見ると、資本主義というものの基本性格がよく分かります。それは、すべての人間の「自由」が解放された市民社会に独自の経済システムで、古い王権的支配の社会における経済、直接収奪の支配と対照的です。つまり王権社会の経済は、「強制的経済」だけれど、資本主義の経済は人々を解放し、いわばその自主的な競争経済を利用して生産性をどんどん高めるといふ「競争の経済」なのです。これが資本主義というシステムの基本性格です。

さて、われわれはこういう資本主義の社会に生きている。資本主義では昔とちがって、あらゆるものが商品となるので、われわれの欲望もずっと多様化します。しかし同時に、もう一方で、われわれの欲望は、ある意味でみな似たようなものになるのです。それがさっき言った「一般欲望」です。

資本主義の経済でこの一般欲望を^イジョウチョウウするのは、「お金」です。

お金がなぜ出てくるかを考えてみましょう。ひとこと言くと、いろんな商品が交換されるようになると、お金というものが必要になる。なぜならお金は、誰でも、どこでも商品交換がすぐにできるように、さまざまな商品の値打ちを、「これは100」とか「これは90」、「これは80」というように、すべて

を価値のジョレツに並べ替えることができる便利なアイテムだからです(マルクスは『資本論』でこれを一般的価値形態と呼びました)。

一番大事な点は、お金は質の違うすべてのものを、共通の価値で量るシャクドだということです。そしてこれは、誰かが工夫して作ったというより、いろんな欲望が交換されているうちに、いわば自然に「一般価値」としてできてきたものです。

近代社会では、生活が多様になるので、さまざまな異なった欲望が現われます。ところがそれと裏腹に、資本主義社会では、この多様な欲望が、普遍的に(あまねく)交換される。そこで価値は一般化され、それに応じて「一般欲望」というものが現われるのです。

これを哲学的に言うところになります。人間は社会の中で生きるが、ここで人間の欲望とは、「自分が欲しいものを欲しい」であるより、むしろ、「他人が欲しいものを欲しい」である。たとえば、金や名声や権力は、「誰もがそれを欲しているという理由で、誰もがそれを欲しくなるもの」なのです。だから、この社会で生きるかぎり、われわれは誰も自然に、「一般欲望」(他者の欲するものを欲する)を育て上げることになります。

しかし、大事なのはつぎのことです。われわれがこの自分の欲望をどこかでうまく理解しなおすことができないと、なかなかやつかないことになる。というのは、資本主義社会は必然的にそういう一般欲望を育てるのだけれど、この欲望はあくまで競争の中で生じるものなので、この一般欲望を満たすことのできる人は二割ぐらいの人間だということです。七、八割の人は、自然にそういう欲望を育て、そして失敗するようになっていく。ギャンブルと同じです。

だが、ほとんどの人々が、この、たくさん愛されたい、贅沢をしたい、評価されたい、人の上にたいたい、エラくなりたいたい、といった「一般欲望」を、人間がめざすべきごく自然な目標として自分の中に育てる。だから、もしわれわれがどこかで自分の欲望のあり方をケンショウしなおす機会がないと、幸福になるどころか、この世の中のほとんどの人が不幸になってしまうということになります。

が外れています。

できるだけ簡潔に言ってみます。さきに言ったように、資本主義の一番大事な本質は、それが「持続的に生産を拡大する経済のシステム」だということです。そしてそれは、すべての人間に「自由」を解放する近代社会と切り離せない経済です。そして、哲学的には、この経済システムのメリットははっきりしている。

④生産の効率がどんどん上がるから、みな豊かになる。そしてそのことはいちばん分かりやすい結果は、人間がだんだん、必要労働から「自由」になるということです。そうなれば、労働の時間が少なくなり、その分、いろんなところに余裕がでてくるはず。これは分かりやすい話です。

ところが、近代社会は、なかなかそうならない(といってもまったくなくないわけではなく、先進国は週休二日がふつうになってきた)。むしろ、資本主義では、人間が仕事に追いつまらなくなるといふような感じさえある。なぜでしょうか。これも原理的にははっきりしている。

近代社会は、国家どうしで分かれて激しい経済競争をしている。昔は激しい武力競争をしていたから、それよりはましです。しかし、複数の国家が経済の競争をしているかぎり、おたが相手には負けないように必死にがんばることになる。

経済の競争というのは、やっかいな性格があつて、お金がたまると、ますます競争に有利なのです。すると競争に負けると没落するかもしれないという不安から、どの国もますます必死に生産競争の効率を上げようとするのです。こうして結論はこうです。資本主義はなかなか画期的な経済の仕組みで、どんどん生産を増やすシステムだから、それだけで考えると、人々の暮らしを豊かにし、また労働の時間をすこしずつ短くすることができるとは思えません。ところが、これが相互の競争システムになっていると、生産を高めるための歯止めのない無限競争になるのです。

近代社会がこんな具合に進歩するほど、社会の中での価値感、お金を儲ける能力が集まってくる。人間の欲望も、いろいろばらついてよいはずなのに、

さて、このように言うと、資本主義的なこの無限に増殖する欲望が問題だ、とか、資本主義それ自体、あるいはそれを作り上げる「お金」が悪い、とか、それを後押しする近代の科学技術がいちばん問題だ、と思う人もいるかもしれない。しかし、これはわれわれが何か矛盾を見出したときによく陥る誤謬推理[＊]というものです。

③誤謬推理は、ことからの原因—結果を恣意的にたどって、なんでもこれかと思ふものを好き勝手に「悪の根源」と考える思考法です。

たとえば、若者がひどい「犯罪」を犯すと、多くの人がそれぞれ「根本原因」をあげつらいます。学校の先生の無理解が悪い、とか、親のしつけが悪いとか、教育が悪いとか、社会が悪いといった意見がどんどん出てきます。これはある意味でごく自然なことだけれど、哲学的にはただ自分の直観を補強しているだけで、直観補強の考えの典型です。

＊ソクラテスは昔、裁判によって死刑を宣告されたとき、周りの者から逃げるように勧められたが、逃げずにアテネに留まっている。その「原因」について、こんな具合に言います。

自分がいまこのイスに座していることについて、私の脚の筋肉や腱の具合で説明する人もいるだろうし、その他、自分がアテネにいる理由とか、その他いろんなことを持ち出して、その「原因」とする人がいるだろう。しかしいちばん大事なものは「真の原因であるもの」と、それがなければ原因が原因たりえないものとを区別することである、と(プラトン『パイドン』)。

その通りで、哲学では、あることからの原因を考えるとき、その「本質」的原因と「派生」的原因をはっきり区別する、というのが、ゴールデンルールです。なぜ、いまの資本主義社会の欲望が、このような果てなく、ギャンブル的な欲望になるのかの根本原因は、それほど簡単ではない。でも、資本主義が悪いとか、お金が悪いとか、近代の科学主義が悪いとかいう考えは、基本的に

どうしてもそうならず、「きれいになって、セレブになりたい」とか「かっこよく、高収入の仕事」といふような「一般欲望」へとなびくわけです。

さてしかし、いまの資本主義を、もうすこし合理的な資本主義に変えてゆく哲学的な「原理」は、私はあると思います。ごく簡単に言うと、本来資本主義システムはウィンウィンゲーム(みんなが利益を得るゲーム)でありうるが、いまはほぼ「ゼロサムゲーム」(誰かが勝つと、誰かが負けるゲーム)に近い。どうやって、国際的な資本主義のありかたを「ウィンウィンゲーム」に変えることができるかが、このポイントです。

⑤しかしいずれにせよ、それにはかなり時間がかかる。そしてこの原理の条件をすこしずつ整えていくことと、とりあえずいまわれわれが、この世の中にどう対処して生きるかは、別のものとして考える必要があるのです。

(竹田青嗣『中学生からの哲学「超」入門』)

(注) ＊インフラ……道路、港湾、井戸など生産や生活の基盤になるもの。

＊嗜好品……たばこ、コーヒーなどのこと。

＊マルクス……ドイツの経済学者。

＊誤謬……間違い。

＊恣意的……勝手気ままに。

＊ソクラテス……古代ギリシャの哲学者。

＊プラトン……古代ギリシャの哲学者で、ソクラテスの弟子。

問一 傍線部イーホのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「生産をつねに増大させるような経済システム」を端的に言い表している語を、文中から四字で抜き出しなさい。

問三 空欄 A C に当てはまるものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 稼いだお金で消費する
- イ お金をたくさん流通させる
- ウ もっとたくさん作りたい
- エ たくさん売れば儲かる
- オ 能力に見合った報酬を得る

問四 傍線部②「やっかいなこと」とは、どのようなことですか。次の文の空欄を、文中の表現を用いて三十文字程度で補いなさい。

資本主義社会では、
こと。

問五 傍線部③について。ここでは「誤謬推理」が否定されていますが、その根拠が筆者の言葉でまとめられている一文を文中から探し、最初の五字を抜き出しなさい。

問六 傍線部④「生産の効率がどんどん上がるから、みな豊かになる」について。このことを端的に言い表している言葉を文中から十字以内で抜き出しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

歩き始めて1時間、やっぱ引き返そうかなあと思ったときに、視界を黄色いものがかすめた。なんだろうと思って道をはずれて寄っていくと、それは麦わら帽子だった。人がいたのだ。びっくりした。しかも彼は、キャンバスに向かつて絵を描いていた。

人に出会うとは思ってもいなかったで、私は心底ほっとした。誰にも会わない知らない森というのは心細いものである。

「こんにちは」

背後からそっと声をかける。振り向いたのは不精髭を生やした痩せた男性で、青黒い顔色をしていた。たぶん、顔に緑が映っていたのだろう。20代の後半くらいに見えた。

「絵、描いているんですか？」

彼はまた、べこんとうなずいた。近寄って覗き込んでみると、それはまさにジャングルの絵だった。実際の風景よりも、ずっと暗くて深くて怖かった。不思議な絵だ。奥行きがなくてつべりしていた。陰影だけが濃く、遠近感が感じられない。

②「なんだか、吸い込まれそうで怖い絵ですね」

私は思わず呟いた。すると、彼は初めて口元をゆがませて笑った。

「森の深く深い力を描いているんです」

外見の印象よりもちょっと甲高い声だった。久しぶりに声を出した、って感じで語尾がかすれていた。

「そんな力が森にあるんですか？」

「森は邪悪なもの棲み家です」

変な人と会ってしまったなあと思った。

「ふうん。私にとって、森は気持ちいい心やすらぐ場所だなあ。感じませんか、この森に溢れる大量のフイトンチッド。ほどよい湿気を含んだ清浄な空気。屋久島の森に入ると、私は元気が出ちゃいます」

すると彼は軽蔑するように言った。

問七 傍線部⑤について。「別のものとして考える必要がある」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 資本主義をよりよいものに変えていくことは必要だが、今の激しい経済競争を急に変えることは不可能であるため、その中でどう生きていくかも同時に考えていかなければならないから。
- イ 今の資本主義社会のもので生きることが非常にむずかしいため、現実を生きることが理想的な資本主義を追求することの両者を考えていかなければならないから。
- ウ 資本主義を誰もが利益を得られるシステムに変えていくための条件を一手に整えることはむずかしいので、まずは今をどう生きるかを考え直さなくてはならないから。
- エ 今の資本主義社会のもので生きなければならぬため、合理的な資本主義のありかたは考えずに、経済競争の長所だけに注目していかなければならないから。

「気持ちよく美しいものだけが、この世界を創り上げていると思うのは軽薄じゃないですかね。きれいで気持ちいいものだけがハッピーで、ハッピーなことがいいことだなんて、誰が決めたんでしょうね。ふんわりして、優しいものだけが癒しなんじゃないか。それは自然に対するものすごい偏見だと思えます。きれいなものだけがあればいいんですか？ 強烈で目もくらむようなもの、暗くて深いもの、このうえなく邪悪なものは、世界には必要ないんだらうか？」

「げえ。難しいこと言わないでください。私はただ、邪悪って言葉が森のイメージになかったから、ちょっとびっくりしちゃっただけです」

私があわててそう言うと、彼はまた声を出さずに笑って「コーヒーでも飲みますか？」と言った。③「なんかつ私はこの男性にからかわれているみたいだった。」

「ところで、さっきフイトンなんか……とか言ったでしょう？ あれ、なんのことですか？」

「ああ、フイトンチッドね。植物が出す物質のことなんです。植物はね、体が傷つけられたりすると、自分のまわりにある他の生物を殺すような物質を出しますよ。微生物や、細菌とかからの感染を防いだりするためにね」

「ほう……」

「たとえば、ニンニクという植物はすごくたくさんのフイトンチッドを出します。ニンニクのフイトンチッドは、ブドウ球菌とか、連鎖菌、ジフテリアなどに対して破壊的な作用を及ぼすって言われています。昔、ヨーロッパでは伝染病が流行すると戸口にニンニクを飾ったけど、あれは、呪いとかじゃなくて科学的な意味があったんですよ」

「ドラキュラにニンニクというの、そういうことなのかな」

ポットのコーヒーをカップに注いでもらった。香ばしい湯気が立つ。こんなにコーヒーがいい匂いだと思ったのは初めてだ。

「そうですね。きっとニンニクのフイトンチッドがドラキュラに効いたんでしょね。結核の診療所が高原にあるのも、植物の殺菌作用を利用しようとしたのかもね。この屋久島の森も、きっとたくさんフイトンチッドが出ていると思うな。だってね、営林署のおじさんが言っていましたもの。ちょっとくらい体

調が悪くても、森に入って仕事するとよくなっちゃう、って」

「確かに、この島に来てから、体調がいいや。しかし、人間はこれだけ樹を切り倒して植物を殺しているのに、なぜ人間を殺すフイトンチッドは出ないんだろう」

彼は真顔でそう呟いた。

「げっ。それって怖いな。でもさ、人間っていつかそうやって植物から復讐^{ふくしゅう}されるときが来るのかもしれないですね」

彼は名古屋から来たという。森やジャングルの絵を描くのが好きで、いろんな森に出かけるそうだ。でも、こんなことを言っただけで失礼だが、彼の絵はこの森を描いてもそう変わり映えしないのではないかと気がした。

「いつも、こんな絵を描いているんですか？ これってアブストラクトに近い感じ。失礼かもしれないけど、これをわざわざ屋久島に来て描く必要があるんですか？」

「はははは。正直な人ですね。確かにそう思われてもしょうがないけれど、僕にはこの風景がこんな風に見えるんだ。今、見えているものを正直に描いているだけなんですよ」

芸術家なんだなと、感心した。もう一度彼の絵をじっくり見ただけで、何度見てもそれは暗くのっぺりしたジャングルだった。強烈で、そして気味が悪い。⑤緑の奥の闇に潜むものの気配を感じさせる絵なのだ。このジャングルの奥にはなにかが隠れている、そんな気がしてくる。まるで自分の無意識につながっているかのように。

「僕は、森に潜む者に魅^み入られてしまったんですよ」
ぽつりと彼が言った。

「それ、どういうこと？」
「うーん、つまり、森の邪悪な神に出会ってしまったというか……」

不思議な話だった。
今から7年ほど前、彼はバリ島を旅した。その頃はジャングルに興味があつたわけではなく、ただバリ島をメグ¹って、いろんな場所を描いてみようと思っ

の絵を見ているとそんな気がしてくる」

絵の中の草むらの闇。それは自分の心の闇じゃないだろうかと思った。見えないものを見ようとするときに、人はどんな目を使うのだろう。夢を見るときの目じゃないだろうか。目をつぶっても見える映像、それはいったいどこで見ているのだろう。でも確かに、^{また}瞼を閉じても人はさまざまなものを見る。心で見ているのだ。だとしたら、心の目を使えば、この絵の闇に潜むものも見えるかもしれない。私はじっと、目の裏側に神経を集中した。内なるスクリーン。無意識のギンマク。そこに絵から感じ取ったイメージを映し出そうとしてみた。そして、現われたのは、意外にも去年亡くなった兄の姿だった。まるで不意打ちのように現われた兄の姿。脈が一気に速くなるのがわかった。兄は、暗闇で膝を抱えていた。生前、彼が好きだった姿勢だった。

「なにが見えました？」

声と同時に姿はかき消えた。

「死んだ兄貴がいた」

「そう……」

彼は、ベツダン²驚いた風でもなく、私の顔を見た。

「私ね、兄貴が死んだとき、ぜんぜん泣けなかったんだよね。それで、あつという間に忘れてしまったって薄情だなあって自分で思ってたんだけど……、あの人、こんなところにいたのか」

だんだんと日がカタム^ホいてきて、少しずつ気温が下がっていくようだった。彼は黙って帰り仕度^{かきじど}を始めた。私はぼんやりとそこに立って、なんとなく彼の言葉を待っていた。

「僕はね、この緑の闇の中にいるものは『死』だと思うんです」

彼は自分の絵の中に目をこらすようにして言った。

「人間は生まれた瞬間から死に向かって生きていくようなものでしょう。僕はあのバロンに出会ってから、死について考えることは生きることだと思った。強烈な生は、死を予感させるような生だと思いませんか」

「死ぬことを考えながら生きるのは、あんまり楽しくないなあ」

た。

ある日、ウブドゥの山に入って絵筆をとっていた。鬱蒼^{うさうさ}と茂る緑のジャングルの中で風景を写しとっていたら、なんだか妙に気分が昂揚^{きやうぎやう}してきた。絵に没頭^{ぼつとう}して時間が止ってしまうことはしょっちゅうあった。でも、いつもとは違う、ぞくぞくするような気分だった。きつと暑さのせいだと思った。汗がだらだら流れる。耳の奥がじんじんとした。体の中心はとてクリアなのに、考えがまとまらない。

頭の中が真っ白になって、気が遠くなってしまいそうだった。そして、それは現われた。

「な、なにが現われたんですか？」

「わかりません。色とりどりの奇妙なお面を被った人々が、ゆっくりと目の前を通りすぎていったんです。みんな僕の前まで来ると、お面を僕の方に向けるんです。僕にお面を見せているみたい。そして、行列は音もなくまたジャングルの奥へ消えていった。僕はなんだかとってもなく荘厳^{そうげん}な気持ちになって、ただ茫然^{ぼうぜん}と彼らを見送りました。夢なのか、現実なのかはまだによくわからない。後になって、そのお面がバロンダンスに使われる仮面と似ていることを知りました。バロンというのは、バリ人がシンコウ^{シンコウ}している山に住む神のことなんです」

以来、彼は森やジャングルに住む神を求めてさまよっているのだそうだ。

「その後、どこかで神に出会いました？」

「いいえ。会えませんが、気配を感じるだけ」

彼の絵の闇に潜む気配は、彼が感じている山の神の気配だったのかもしれない。

「確かになにかが潜んでいるような気がする」

彼はおもしろそうに私の顔を見上げた。

「感じますか」

「うーん。なんとなく、この草むらの陰になにか隠れていそう……。あなた

「死ぬことを考えながら生きるのではなくて、死を感じながら生きるんです。そうすれば、人生の陰影が深まる。生の光を死が濃くふちどるから」

ふと、屋久島の樹のことを思い出した。古い葉の上に萌えだす新緑、そのふたつの緑の陰影によって作り出される初夏の樹林の生命感。もちろん、彼の言わんとしていることはもっと別のことなのだろうけど。

(田口ランディ「ひかりのあめふるしま 屋久島」)

(注) *アブストラクト……抽象画

問一 傍線部イホのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄に当てはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア めつたに イ おそらく ウ よもや
エ まるで オ ぜひ

問三 傍線部①「それ」は何を指していますか、文中から抜き出しなさい。

問四 傍線部②について。「私」が「怖い」と感じるのは「私」と「彼」の森に対する考え方に違いがあるからです。その違いを文中の表現を用いて説明しなさい。

問五 傍線部③「なんか私はこの男性にからかわれているみたいだった」とありますが、そう感じた理由を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 絵を描くことに真剣で迷惑そうにしていたかと思ったら、突然なれなれしくなったりして、「私」を困らせるような態度をとったから。
- イ 世界について真剣に議論をしていたにもかかわらず、いきなり話題を変えて、「私」を馬鹿にしているような態度をとったから。
- ウ 「私」のことを見下すような態度を示したかと思えば、急に気づかたりして、「私」を混乱させるような態度をとったから。
- エ 難しい話は「私」には理解できないだろうとでも言うかのように、笑いながら「私」にコーヒーを勧めたから。

問八 「私」と「彼」の生と死に対する考え方の説明として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」は生の中に死の影を見出すことはできないと考えているが、「彼」は生の中に死が必ず存在していると考えている。
- イ 「私」は死を意識することは無意味だと考えているが、「彼」は死を意識しないと生は感じられないと考えている。
- ウ 「私」は生や死を植物に関するものとして考えているが、「彼」は人間の生き方に関するものとして考えている。
- エ 「私」は死から目をそらしながら生を考えようとしているが、「彼」は生と死を一体のものとして考えている。

問六 傍線部④について、「いろんな森に出かける」のはなぜですか。その理由を文中の表現を用いて、二十五字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑤「緑の奥の闇に潜むものの気配」とありますが、それは何の「気配」だと「私」は考えていますか、文中から抜き出しなさい。

[illegible]

小計	
----	--

小計

10

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八
イ つて ロ							
ハ							
ニ							
ホ							
いて							